

病害虫発生予察情報（1月予報）

令和元年 12月 25日
静岡県病害虫防除所長

1 予報概況

作物名	病害虫名	予報 (1月の県平均平年値)	予報の根拠
トマト	葉かび病・ すすかび病	発生量：やや多 (発病株率 12.2%)	12月中旬発生量：やや少(－) 気象予報：気温：高い(＋) 降水量：並～多い(＋)
	灰色かび病	発生量：並 (発病株率 4.3%)	12月中旬発生量：少(－) 気象予報：気温：高い(＋) 降水量：並～多い(＋)
	黄化葉巻病 (タバココナジラミ)	黄化葉巻病発生量：やや少 (発病株率 3.0%) コナジラミ類発生量：多 (寄生株率 3.3%)	12月中旬発生量 黄化葉巻病：少(－) コナジラミ類：多(＋) 気象予報：気温：高い(＋)
	ハモグリバエ類	発生量：多 (寄生株率 1.1%)	12月中旬発生量：多(＋) 気象予報：気温：高い(＋)
ダイコン	白さび病	発生量：多 (発病株率 4.2%)	12月上旬発生量：多(＋) 気象予報：気温：高い(＋) 降水量：並～多い(＋)
	モザイク病 (アブラムシ類)	モザイク病発生量：多 (発病株率 0.7%) アブラムシ類発生量：やや多 (寄生株率 6.5%)	12月上旬発生量 モザイク病：多(＋) アブラムシ類：並(±) 気象予報：気温：高い(＋) 降水量：並～多い(－)
	コナガ	発生量：やや少 (寄生株率 0.1%)	12月上旬発生量：少(－) フェロントラップ誘殺数：並～少(－) 気象予報：気温：高い(＋) 降水量：並～多い(－)
	ナモグリバエ	発生量：やや少 (寄生株率：19.3%)	12月上旬発生量：少(－) 気象予報：気温：高い(＋) 降水量：並～多い(－)
キャベツ	菌核病	発生量：多 (1月平年値なし)	12月中旬発生量：多(＋) 気象予報：気温：高い(＋) 降水量：並～多い(＋)
タマネギ	灰色腐敗病	発生量：並 (発病株率 0.0%)	12月中旬発生量：並(発生なし)(－) 気象予報：気温：高い(＋) 降水量：並～多い(＋)
	腐敗病	発生量：並 (発病株率 2.9%)	12月中旬発生量：少(発生なし)(－) 気象予報：気温：高い(＋) 降水量：並～多い(＋)

作物名	病害虫名	予報 (県平均平年値)	予報の根拠
タマネギ	ネギアザミウマ	発生量：やや多 (寄生株率 32.6%)	12月中旬発生量：並 (±) 気象予報：気温：高い (+) 降水量：並～多い (±)
ネギ (シロネギ)	さび病	発生量：並 (1月平年値なし)	12月中旬発生量：少(発生なし) (-) 気象予報：気温：高い (+) 降水量：並～多い (+)
	べと病	発生量：並 (1月平年値なし)	12月中旬発生量：少(発生なし) (-) 気象予報：気温：高い (+) 降水量：並～多い (+)
レタス (非結球レタスを除く)	べと病	発生量：並 (発病株率 1.6%)	12月上旬発生量：少(発生なし) (-) 気象予報：気温：高い (+) 降水量：並～多い (+)
	斑点細菌病	発生量：並 (発病株率 2.3%)	12月上旬発生量：少(発生なし) (-) 気象予報：気温：高い (+) 降水量：並～多い (+)
イチゴ	うどんこ病	発生量：やや少 (発病株率 1.6%)	12月中旬発生量：少 (-) 気象予報：気温：高い (+)
	灰色かび病	発生量：やや多 (発病株率 0.6%)	12月中旬発生量：並 (±) 気象予報：気温：高い (+) 降水量：並～多い (+)
	アブラムシ類	発生量：多 (寄生株率 1.7%)	12月中旬発生量：多 (+) 気象予報：気温：高い (+)
	ハダニ類	発生量：並 (ただし中部地域は、多) (寄生株率 13.0%)	12月中旬発生量：やや少 (-) ただし中部地域は、やや多 (+) 気象予報：気温：高い (+)
	アザミウマ類	発生量：やや多 (ただし中部地域は、多) (寄生株率 2.3%)	12月中旬発生量：並 (±) ただし中部地域は、多 (+) 気象予報：気温：高い (+)

表の見方について

- ・ 予報の発生量は平年（静岡県過去の10年間）との比較で、「少、やや少、平年並、やや多、多」の5段階で示しています。
- ・ 予報の発生時期は、時期の予想ができる病害虫に限り、平年（静岡県過去の10年間）との比較で、「早、やや早、平年並、やや遅、遅」の5段階で示しています。
- ・ 予報の根拠には、巡回調査に基づく発生状況（調査時期と発生量）、気象庁の1ヶ月予報（気温と降水量）を記入しています。その状況が多発要因の場合は（+）、少発要因の場合は（-）を示し、+-を総合的に判断して発生時期、発生量を予想しています。

農薬情報は
こちらで
検索！



静岡県農薬安全使用指針
・ 農作物病害虫防除基準

<http://www.s-boujo.jp/>

2 予報の根拠と防除対策

【トマト】

<生育の概況>

生育は平年並である。

●葉かび病・すすかび病

予報の根拠

- ・ 12月中旬の巡回調査では、平均発病株率は12.9%（平年16.6%）と発生は平年よりやや少なかった。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並～多いため、本病の発生を助長する（本病の生育適温は、葉かび病20～25℃、すすかび病27℃程度であり、特に多湿条件下で発生が多くなる）。
- ・ 例年、12月以降はハウスの密閉による多湿で、発生が増加する。

防除対策

- ・ 本病は潜伏期間が2週間程度と長く、多発してからでは薬剤の効果が悪いため、発病が認められたら直ちに薬剤を散布する。ただし、耐性菌の発生を防ぐため、散布薬剤をローテーションする。
- ・ 多湿にならないように換気につとめ、過度のかん水を避ける。
- ・ 発病葉は感染源となるため速やかに摘み取り、ほ場外に撤去する。特に多発生ほ場では摘み取り作業を徹底する。
- ・ 本県では12月以降は葉かび病が優占する傾向がある。

●灰色かび病

予報の根拠

- ・ 12月中旬の巡回調査では、平均発病株率は1.3%（平年3.6%）と発生は平年より少なかった。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並～多いため、本病の発生を助長する（本病の生育適温は23℃程度であり、特に多湿条件下で発生が多くなる）。
- ・ 例年、12月以降はハウスの密閉による多湿で、発生が増加する。

防除対策

- ・ 株の繁茂やハウス内湿度の上昇により発生が増加するので、不要な下葉を除去するとともに、日中の換気を早めに行い、施設内の除湿に努める。
- ・ 予防に重点をおいた薬剤散布を行う。ただし、耐性菌の発生を防ぐため、散布薬剤をローテーションする。
- ・ 発病した果実や茎葉は伝染源となるため速やかに取り除き、ほ場外に撤去する。
- ・ 朝夕の急激な冷えこみによる結露は、本病の発生を著しく助長する。そのため、暖房機利用や循環扇による通風などにより植物体への結露を防止し、施設内の湿度低下に努める。

●黄化葉巻病（タバココナジラミ）

予報の根拠

- ・ 12月中旬の巡回調査では、平均発病株率は2.1%（平年4.3%）と発生は平年より少なかった。
- ・ コナジラミ類は、平均寄生株率18.1%（平年5.5%）と平年より多かった。1か月予報では、気温は平年より高いため、媒介虫タバココナジラミの増殖を助長する。

防除対策

- ・ 発病株は伝染源となるため、見つけ次第抜き取り、ハウス外の土中深く埋めるなどして適切に処分する。
- ・ 脇芽や摘果などの残さは放置すると野良生えとなり、媒介虫や本病の伝染源となるので、ほ場付近には放置しない。
- ・ タバココナジラミ成虫の新芽への寄生や黄色粘着板の捕獲数に注意し、発生が増加する場合は薬剤防除を実施する。
- ・ 収穫残さは本病の伝染源となるため、栽培終了後は植物体を完全に枯死させてから施設外へ持ち出す。

●ハモグリバエ類

予報の根拠

- ・ 12月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は4.4%（平年2.1%）と発生は平年より多かった。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高いため、本種の増殖を助長する。

防除対策

- ・ 葉表の白点（産卵痕）や絵描き状の食害痕に注意し、発生が認められる場合は薬剤防除を実施する。本種は幼虫期間が数日から1週間程度と短いため、初期の絵描き症状を見つけ次第、薬剤防除を実施する。

【ダイコン】

<生育の概況>

生育は平年並～遅く、地域によってばらつきがある。

●白さび病

予報の根拠

- ・ 12月上旬の巡回調査では、平均発病株率は15.9%（平年9.8%）と発生は平年より多かった。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並～多いため、発生を助長する（本病は多湿を好み、分生子の発芽最適温度は10℃程度である）。

防除対策

- ・ 白さび病が多発するとワッカ症を併発することがあるため、は種時期の遅い作型では、葉での発病が少ないうちに予防散布を行うことが必要である（予防散布の防除適期は間引き後7～30日）。
- ・ 発病残渣は翌年の伝染源となるため、ほ場に放置しない。
- ・ 排水を良好にするなどして多湿にならないように努める。

●モザイク病（アブラムシ類）

予報の根拠

- ・ 12月上旬の巡回調査では、平均発病株率は7.8%（平年1.1%）と発生は平年より多かった。
- ・ 本病の媒介虫アブラムシ類は、平均寄生株率7.0%（平年6.0%）と発生は平年並であった。
- ・ 1か月予報では、降水量は平年並～多いが、気温は平年より高いため、アブラムシ類の増殖をやや助長する。

防除対策

- ・雨が降らない日が続くとアブラムシ類が急増する場合がありますので、ほ場内の発生に注意し、確認された場合は薬剤防除を実施する。
- ・被害株も伝染源となるため、速やかに抜き取り、ほ場外で土中深く埋めるなどして適切に処分する。

●コナガ

予報の根拠

- ・12月上旬の巡回調査では、平均寄生株率は0.2%（平年0.5%）と発生は平年より少なかった。
- ・浜松市及び牧之原市のフェロモントラップによる誘殺数は、平年並～少なく推移している。
- ・1か月予報では、降水量は平年並～多いが、気温は平年より高いため、本種の増殖をやや助長する。

防除対策

- ・発生が多い場合は、薬剤が葉裏にかかるように薬剤を散布する。

●ナモグリバエ

予報の根拠

- ・12月上旬の巡回調査では、平均寄生株率は1.7%（平年17.8%）と発生は平年より少なかった。
- ・1か月予報では、降水量は平年並～多いが、気温は平年より高いため、本種の増殖をやや助長する。

防除対策

- ・上位葉に白点（産卵痕）や絵描き状の食害痕が多数見られる場合は、防除を実施する。

【キャベツ】

<生育の概況>

収穫期に入っているが、進み具合は地域で異なっている。

●菌核病

予報の根拠

- ・12月中旬の巡回調査では、平均発病株率は1.8%（平年0.1%）と発生は平年より多かった。1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並～多いため、本病の発生を助長する。

防除対策

- ・収穫期に入っているほ場では防除の必要はないが、1月下旬以降に収穫予定のほ場では注意が必要である。
- ・薬剤防除は予防散布や発生初期の散布の効果が高いため、予防散布を行う。複数回散布する場合は、系統の異なる剤を選択する。

【タマネギ】

＜生育の概況＞

生育は平年より約1週間早まっている。

●灰色腐敗病

予報の根拠

- ・ 12月中旬の巡回調査では、発生は確認されなかった（平年発生なし）。
- ・ 本病は多雨で発生が助長される。1か月予報では、降水量は平年並～多いため、本病の発生を助長する。

防除対策

- ・ 春期収穫の作型では、過剰な施肥や肥料の遅効は本病の発生を助長するため、適切な施肥管理に努める。
- ・ 葉身に白斑や葉先枯れが見られるほ場や例年発生が見られるほ場は、鱗茎への感染を予防するため、薬剤による防除を実施する。複数回散布する場合は、系統の異なる薬剤を選択する。
- ・ 罹病球やくず球は、ほ場付近に放置すると発生源となるため早期に取り除き、ほ場外に持ち出して適切に処分する。

●腐敗病

予報の根拠

- ・ 12月中旬の巡回調査では、発生は確認されなかった（平年発病株率0.1%）。
- ・ 病原細菌の生育適温は20～23℃で、強風雨や多湿な環境により発生が助長される。1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並～多いため、本病の発生を助長する。

防除対策

- ・ 本病に対する防除は、定期的な薬剤散布よりも、感染の機会が生じる前後をねらった防除の効果が高い。このため、気象情報に注意し、強風雨の前後に薬剤散布を行う。
- ・ 発生が確認されたほ場では被害株を抜き取り、今後の感染防止を図る。

●ネギアザミウマ

予報の根拠

- ・ 12月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は33.2%（平年30.5%）と、発生は平年並であった。ただし、被害を示す被害度は39.0（平年9.4）と平年よりも高かった。
- ・ 1か月予報では、降水量は平年並～多いが、気温は平年より高いため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

- ・ 例年1月は特に防除の必要はないが、温かい日が続くと増殖を始め、生息密度が高まるので、発生状況に応じて薬剤防除を実施する。

【ネギ（シロネギ）】

<生育の概況>

収穫は平年より10～14日遅れている。

●さび病

予報の根拠

- ・12月中旬の巡回調査では、発生は確認されなかった（平年発病株率3.8%）。
- ・本病は、気温10～22℃の時期に降雨が続くと発生が多くなる。1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並～多いため、本病の発生を助長する。

防除対策

- ・収穫期に入っているほ場では防除の必要はないが、1月下旬以降に収穫予定のほ場では注意が必要である。
- ・薬剤防除は予防散布や発生初期の散布の効果が高いため、予防散布を行う。複数回散布する場合は、系統の異なる剤を選択する。

●べと病

予報の根拠

- ・12月中旬の巡回調査では、発生は確認されなかった（平年発病株率0.5%）。
- ・気温15～20℃で降雨が続くと発生が多くなる。1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並～多いため、本病の発生を助長する。

防除対策

- ・収穫期に入っているほ場では防除の必要はないが、1月下旬以降に収穫予定のほ場では注意が必要である。
- ・薬剤散布は予防散布や発病初期の散布の効果が高いため、予防散布を中心に実施する。

【レタス（非結球レタスを除く）】

<生育の概況>

生育は平年よりやや早い。

●べと病

予報の根拠

- ・12月上旬の巡回調査では、発生は見られなかった（平年発病株率1.2%）
- ・1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並～多いため、本病の発生を助長する（病原菌の生育適温10～15℃で、多湿を好む）。
- ・トンネル被覆後に結露するような高湿度になると発生が多くなるので注意する。

防除対策

- ・初発生を確認したら速やかに薬剤防除を実施する。
- ・トンネル被覆後は、過湿にならないよう換気に努める。

●斑点細菌病

予報の根拠

- ・ 12月上旬の巡回調査では、発生は見られなかった（平年発病株率 1.3%）。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並～多いため、本病の発生を助長する（本病は比較的低温で多湿条件を好むため、トンネル被覆後に結露するような高湿度になると発生が多くなる）。

防除対策

- ・ 発病は主に結球期以降であるが、結球前に薬剤の予防散布をして葉面の病原細菌密度を下げるのが大切である。
- ・ 降雨が続くときや初発生を確認したら速やかに薬剤防除を実施する。
- ・ トンネル被覆後は、トンネル内が高湿多湿にならないよう換気に努める。

<その他の病害虫>

●菌核病

- ・ 12月上旬の巡回調査では、平均発病株率 0.2%（平年 0.2%）と、発生は平年並であった。
- ・ 発病後の薬剤散布では効果が劣るため、常発地では定植後 30～40 日で、本葉が 8～10 枚程度出葉した頃を目安として予防散布を行う。
- ・ 発病株には菌核が形成されて伝染源となるので、ほ場に放置せず速やかに撤去する。

【イチゴ】

<生育の概況>

生育は地域によってばらつきがあり、平年より遅い～やや早い。

●うどんこ病

予報の根拠

- ・ 12月中旬の巡回調査では、平均発病株率は 1.1%（平年 2.0%）と発生は平年より少なかった。
- ・ 本病は気温が 20℃前後のときに発生しやすい。1か月予報では、気温は平年よりも高く、ハウス内の気温は本病の発生に適する。

防除対策

- ・ 株の過繁茂は発生を助長させるため、不要な下葉は除去する。
- ・ 初期発生に注意し、発病が少しでもみられるほ場では早急に防除を行う。
- ・ 今後は果実での発生も多くなるので、発病した果実は速やかに取り除く。

●灰色かび病

予報の根拠

- ・ 12月中旬の巡回調査では、平均発病株率は 0.4%（平年 0.3%）と発生は平年並であった。
- ・ 本病は気温が 20℃前後で、多湿条件のときに発生しやすい。1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並～多いため、ハウス内は本病の発生に適する。

防除対策

- ・株の繁茂やハウス内湿度の上昇により発生が増加するので、施設内の除湿に努める（不要な下葉を除去する、日中の換気を早めに行う、かん水量を必要最小限にするなど）。
- ・発病した果実や茎葉は伝染源となるため速やかに取り除くとともに、枯葉、老化葉、不要な果梗枝も取り除き、ほ場外で埋没処分する。
- ・予防的な薬剤防除に努める。曇雨天が続く場合はハウス内湿度が上がるのを防ぐため、くん煙剤を利用する。薬剤の使用に当たっては、薬剤感受性の低下を避けるため、作用機構が同じ薬剤の連用を控え、異なる FRAC コードの薬剤をローテーションして使用する。

●アブラムシ類

予報の根拠

- ・12月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は3.7%（平成15.5%）で発生は平成より多かった。
- ・1か月予報では、気温は平成より高いため、本種の発生を助長する。

防除対策

- ・今後、外からの侵入は少なくなるが、アブラムシ類の発生に注意し初期防除に努める。
- ・天敵を利用する場合は、寄生されたアブラムシ（マミー）の発生状況をよく観察する。
- ・アブラムシ類が多発した場合は、天敵（チリカブリダニ、ミヤコカブリダニ、アブラバチ）に影響の少ない薬剤を選択し散布する。

●ハダニ類

予報の根拠

- ・12月中旬の巡回調査における平均寄生株率は、東部地域では8.4%（平成9.5%）、西部地域では13.6%（平成17.6%）と平成よりやや少ない発生であったが、中部地域では21.4%（平成18.1%）と平成よりやや多い発生であった。
- ・1か月予報では、気温は平成より高く、本種の発生を助長する。

防除対策

- ・ハダニ類の寄生が認められた場合は、少発生のうちに防除する。なお、ハダニ類の発生している株が点在している場合は、発生株周辺にスポット散布するなど、迅速に対応する（農薬の総使用回数に注意する）。
- ・ハダニ類は薬剤抵抗性が発達しやすいので、物理的に作用する剤や天敵を利用する。また物理的防除剤は卵への効果が低く、残効が期待できないため、5日間隔程度で連続散布する。
- ・天敵を利用し、追加放飼をする場合は、ハダニ類と天敵の発生状況をよく観察する。
- ・ハダニ類が多発した場合は、天敵（チリカブリダニ、ミヤコカブリダニ、アブラバチ）に影響の少ない薬剤を選択し散布する。

●アザミウマ類

予報の根拠

- ・ 12月中旬の巡回調査における平均寄生株率は、東部地域では 0.8% (平年 0.8%)、西部地域では 0.0% (平年 1.2%) とほぼ平年並の発生であったが、中部地域では 8.2% (平年 4.8%) と平年より多い発生であった。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高く、本種の発生を助長する。

防除対策

- ・ 最近、アザミウマ類の発生及び被害が多いため、花での本種の発生状況をよく観察する。また、必要のない花は摘み取る。
- ・ 例年多発するほ場では、開花初期の防除を徹底する。
- ・ 天敵を利用している場合は、天敵 (チリカブリダニ、ミヤコカブリダニ、アブラバチ) に影響の少ない薬剤を選択し散布する。

<その他の病害虫>

●炭疽病

- ・ 12月中旬の巡回調査では、平均発病株率は 2.9% (平年 0.7%) と発生は平年より多かった。
- ・ 発病ほ場では、ハウス内温度が高いと今後も新たな枯れこみが発生する。本病は高温多湿条件下で多発するため、天窓、側窓の開閉により、ハウス内の気温の過度な上昇をさける (発病適温は 25~30℃)。
- ・ 発病を認めた場合は、直ちに発病株を抜き取り、ビニール袋に入れハウスの外に持ち出し処分する。

3 季節予報

● 1か月予報 (東海地方 令和元年12月19日 名古屋地方気象台発表)

【予報期間】 12月21日から1月20日

【予想される向こう1か月の天候】

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。岐阜県山間部では、平年と同様に曇りや雪または雨の日が多いでしょう。

向こう1か月の平均気温は、高い確率60%です。降水量は、平年並または多い確率ともに40%です。日照時間は、平年並または少ない確率ともに40%です。

週別の気温は、1週目は、高い確率80%です。2週目は、高い確率50%です。

【確率】

期間	要素	低・少	平年並	高・多%
1か月	気温	10	30	60
1か月	降水量	20	40	40
1か月	日照時間	40	40	20
1週目	気温	10	10	80
2週目	気温	20	30	50
3～4週目	気温	30	30	40

【予報の対象期間】

1か月 : 12月21日(土)～1月20日(月)

1週目 : 12月21日(土)～12月27日(金)

2週目 : 12月28日(土)～1月3日(金)

3～4週目 : 1月4日(土)～1月17日(金)

※ 利用上の注意

- ・気温・降水量は「低い(少ない)」「平年並」「高い(多い)」の3つの階級で予報します。階級の幅は、1981～2010年の30年間における各階級の出現率が等分(それぞれ33%)となるように決めてあります。(気候的出現率と呼びます)。
- ・晴れや雨などの天気日数は、平年の日数よりも多い(少ない)場合は「平年に比べて多い(少ない)」、また平年の日数と同程度に多い(少ない)場合には「平年と同様に多い(少ない)」と表現します。なお、単に多い(少ない)と表現した場合には対象期間の2分の1より多い(少ない)ことを意味します。

お問い合わせは

静岡県病害虫防除所 〒438-0803 磐田市富丘678-1

TEL 0538-36-1543 FAX 0538-33-0780

URL <http://www.agri-exp.pref.shizuoka.jp/boujo/boujo.html>